

僕が育った家は、宇和島城の堀を埋めた上に建っている。前の通りは堀端通りと言って、子供の頃には柳の木も何本かあり、落ち着いた城下町の佇まいを残していたが、今は数軒の建物に名残を見るしかない。

写真で知るだけだが、裏手には国宝に指定された城に通じる追手門があった。戦時中の空襲によって、

大まかにはそこから海側が焼け、山側は残った。ある

時期まで市街を眺望すると、新しく建った白っぽいコンクリートの建物群と、昔ながらの瓦屋根の家並みにくっきり二分して見えていた。その後、老朽化した山側の古い家は次々と壊され、差はなくなりつつある。残念ながら僕は今の日本の町並みを好まない。世界に名を馳せる建築家を輩出

する日本だが、シンボリックな建物ばかりを競い、市井の人の家から成る町並みのことをあまり考えてくれているようには思えない。

人が時間をかけて育て、使うほどに味わい深くなる家々ではなく、建てたその日から劣化に向かう。ダメになれば打ち捨てて次のものを手に入れるといった、

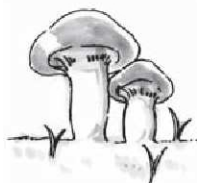
### 町並み

車や電化製品と同じ消費社会に埋没してゆくもの。それにしてもそのスパンの早いこと。

最近では、住宅メーカーが売り込むスマートデザインで化粧した家が次々と建っている。社会構造の変化に合わせてつくり、また耐震はもとより建材も研究され、優れて進歩していると

言っているのかもしれない。しかし僕は、何かあのヌラペラツとした質感に違和感を持つ。土地柄は薄まり、どこに行っても似たり寄ったりの町になってしまった。

江戸の町を想像してみる。自然木と瓦屋根、土壁



と漆喰の家々が立ち並び、点在する朱や藍の色が粋を演出する。豪壮な武家屋敷であれ、細い柱に薄い板で造った長屋であれ、見せ掛けでちゃらちゃらず、人の息遣いに密着したもので

はなかったか。江戸の町にはひとつの成熟があったよ

うに思える。

今もとどこどこころにある、飾りっ気なく慎ましい使い込んだ家を見ると、清々しい気分になる。賞味期限の短い格好良さに乗っかるのではなく、昔の人が柱を乾拭きしていたように、慈しみながら年輪を重ねてゆく家。そんなゆとりのあるものはもう持てないのだろうか。

僕が暮らすアトリエ兼住居も築90年。何でもない当時の普通の家だ。我々は、日々触れる町並みが醸し出す空気の中で生きている。とすると、その受ける影響は少なくないはず。今ある町並みは、この時代に生きる人々の姿をそのまま表わしているということにもなる。

(吉田 淳治・画家)